

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第十五号（二〇〇七年八月）

古墳幻想

打田昇二

昭和四七年（一九七二）に発見された高松塚古墳の壁画は国宝に指定され、損傷部分の修復などで大騒ぎをされているが、肝心の古墳の主は未だに確定されていないと思われる。出土した「海獣葡萄鏡（かいじゅうぶどうきょう）」と遣唐使の関係から忍壁親王（おさかべしんのう—天武天皇の第八皇子）だと主張した中国の研究者もいたようで、範囲が狭まってはいるのであろう。しかし「三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）」がやたらと出回るようになってから鏡の信用がなくなつたし、高松塚古墳の場所が天武・持統両天皇の陵墓に近すぎるのも気になる。これが、似たような名前ながら両天皇の間に生まれた草壁親王（くさかべしんのう）の陵墓なら解るのだが。

七世紀には、九州が中心ではあるが各地の古墳内部に壁画などが描かれるようになった。古墳時代の終末期を象徴して「装飾古墳」と呼ばれる。茨城県でも勝田の虎塚古墳の壁画が知られており、船塚山（石岡）、愛宕山（水戸）と共に古墳として「国の史跡」に指定されている。それは「東日本には例がない横穴石室前方後円墳」であり「東国最後の前方後円墳」としての評価らしい。虎塚古墳の壁画は「絵」というよりも朱色の大きな円の文様と鱗（うろこ）をデザインしたような三角文様が二つずつ正面にあり、上部には連結した鱗文様が、下部には武器・装飾品なども描かれている。

この古墳は、高松塚と同じ頃に東京国立文化財研究所などが調査を開始したのだが一旦は中断された。高松塚に較べると壁画が単純なせいかもしれないが、円や三角の文様は古代人が恐れた虺（蛇類）の象形であり、高松塚古墳の大陸系美人画よりはよほど日本的だと私は思っている。少し遅れたが昭和五三年秋からは、一般公開を念頭に置いた虎塚古墳の発掘整備が始められた。この古墳の面白いところは一番重要な被葬者の名前もはっきり判っていて、実は遙か神話に属する仁徳天皇時代に盗掘されたことが日本書紀に記録されているのである。

日本全国で約二十万基と言われる古墳のうち、石岡自慢の船塚山古墳は規模が四十六位になっている。東国（関東・甲信越・東北）でも第二位であるが、古墳は昔の葬式に配られた饅頭と違ってデカければ良いというものでもない。調査が行われて被葬者が日本の歴史に影響を及ぼす大物の墳墓でもあれば石岡市の名声は上がるかも：船塚山古墳の被葬者は応神王朝の「茨城国造（いばらきのくにのみやつこ）筑紫刀禰（つくしとね）」に擬定されていたようだが確定はされていない。そのことは後で述べるとして、今は大きさでは船塚山の足元にも及ばない虎塚古墳の謎に注目して頂きたい。

虎塚古墳の被葬者は蝦夷征伐で倒れた「田道」という武将で、その根拠となるのは次のような話である。ただ、仁徳天皇時代というのは怪しい。

仁徳天皇五十五年、蝦夷が謀反を起こした。朝廷は上毛野（かみつけの—群馬）の豪族・竹葉瀬の弟である「田道」を遣わして蝦夷を討たせた。常陸国と陸奥国との国境付近で両軍相譲らぬ激しい戦闘が続き、田道は伊寺水門（いしのみなど）で戦死を遂げた。田道の従者が混乱の中で取り敢えず遺品として田道の腕に巻かれていた飾り（勾玉）だけを外して戦場から持ち帰った。戦が鎮まってから従者は田道の遺体を虎塚に埋葬し、形見の腕輪を田道の妻に渡した。妻は悲しみのあまり遺品を腕に巻いて自ら首を吊って死んだ。当時の人たちはこの話を聞いて同情の涙を流した。

幾年かが過ぎて蝦夷が再び常陸国内に入り込んで掠奪を繰り返したが、田道の墓があるのを知って過去の合戦の怨みとばかり寄つてたかつて墓を暴いた。墓の中には大蛇が居り、目を怒らし毒を吐いて侵入者を攻撃したので蝦夷は悉く命を落とし、僅かに数人が助かったのみである。土地の人々は「田道は既にこの世に亡き身で（大蛇と化し）仇を討った！」と、この話を語り伝えた。

合戦場となった「伊寺水門」に具体的説明はないが私は「鵜の岬」として知られた北茨城の伊師浜であろうと考えている。征服途上の蝦夷地に隣接する県北でも合戦は行われたし、敵地で戦死した上毛野出身の田道の遺体が離れた故郷でなく常陸国内の虎塚古墳に葬られたとしても不思議ではない。ただ、田道の戦死、つまり虎塚古墳の築造は西暦六〇〇年以降と推定されるので、どのように小細工しても仁徳天皇時代にはならない。しかも地方の出来事なのに日本書紀の仁徳天皇治世の項に編集されている理由は何であろうか。勿論、仁徳天皇そのものが実在性に疑問を持たれているのだが、なぜ、遠く離れた常陸国北部の虎塚古墳の記事なのか？。

大化の改新が行われる十年ほど前の西暦六三七年にも蝦夷が叛き、上毛野の武将形名（かたな）が將軍に任命されて現地向かった。ところが敵の数が多く苦戦を強いられたため軍を退いて城砦に籠ったのだが回りを敵軍に囲まれ窮地に陥った。長期の籠城に耐える食糧も武器もなく「最早や是までぞ！」と討ち死にを覚悟

した。そのときに、一緒に来ていた形名の妻が「貴方、確りしてください。ここで負けては遙々とやってきた武人の名折れです。知恵を絞つて何とか窮地を脱しましょう」と夫を励まし、一つの計略を提案した。まず藁で上半身だけの人形を造つて城の回りに置き、自分を含めて数十人居た女性に男ものの衣裳を着せ武器を持たせて兵士の間に配置した。

全員に有るだけの酒を飲ませて弓の弦音を立てたから自然と騒がしくなり、蝦夷軍から見ると城の兵力が急に増え、今にも反撃してくるような危険を感じた。作戦は成功して蝦夷軍は囲みを解き、退却を始めた。形名は「こごぞ」と追撃したので蝦夷軍は壊滅状態となり大勝利を収めたのである。上毛野の形名が妻の機転に救われた話であるが、どうも虎塚古墳の築造年代がその頃と推定されるから、或いはそれが蝦夷征伐に協力した地域豪族の墳墓かも知れない。

一方、日本書紀が書かれたのは西暦720年であるが、その年の記録を見ると9月に陸奥国で蝦夷が大きな反乱を惹き起こしており現地に行っていた「按察使（あせちし―地方行政監察官）」の上毛野廣人（かみつけのひろと）が殺された。大和朝廷は多治比縣守（たじひのあがたもり）を將軍に命じて鎮圧させている。蝦夷（縄文系民族）は弥生系民族に圧迫されて北へ押し上げられたのだから、反乱反抗は頻繁に起きるし、同じ頃に反乱を抑える措置として関東甲信越の住民を蝦夷地へ強制移住させてもいるので、その反対運動があつた筈であり、蝦夷の

反乱に呼応して常陸国内でも小規模な暴動がなかつたとは言いい切れない。反乱となれば埋蔵品への欲も絡んで蝦夷征服で倒れた武将の虎塚古墳がまず狙われる。

古墳内に侵入した暴徒たちが内部のお宝を盗む間も無く、充滿していた一酸化炭素だかメタンガスを吸って窒息死してしまつたことも考えられる。虎塚古墳内部には気味の悪い大きな目玉のような模様と、巨大な蛇の鱗のような模様があつて、侵入者はその前で倒れていた。暗がりでは赤い目の大蛇が鱗を逆立てて居るように見える。地元の人たちは暴徒が大蛇の毒にやられたと噂していたのではないだろうか。

蝦夷対策の前線本部だつた常陸国府（石岡）から都に宛てて、蝦夷反乱（按察使殺害）の報告と、虎塚古墳が荒らされて古墳内に潜入した暴徒たちが怪死する事件の報告が相次いで齎された。事件への対応は専門の部署が行うが、当時、公式記録である日本書紀を書かされていた役人は、過去に遡って架空の人物・仁徳天皇時代の記事が欲しかつたであろう。蝦夷反乱の犠牲になつた役人も、荒らされた古墳の主も上毛野国（群馬縣）の豪族であることに着目した。そして、空白の仁徳天皇にまつわる記事として虎塚古墳（田道）の話を用いたのである。その際に仁徳皇后の事跡として伝えられている物語をモチーフとした。

古事記や日本書紀に書かれた仁徳天皇は、例え「国民の暮らしぶりを望遠鏡で覗いたら朝飯の支度をする竈（かまど）の煙も

上がっていないので生活が苦しいのかと3年間
は免税にした」或いは「灌漑用の池や河川の堤
防を造った」などと善政を伝えたかと思えば、
「大阪平野の土木工事で神様のお告げと称して
二人の人物を人柱(犠牲)にして埋めた」或い
は「国民の苦勞も構わず、美人の噂がある女性
を各地で強引に集めさせて愛人にした」などと
極端に矛盾した行動をとる人物に記録されてい
るから、とても同一人物とは思われず、複数の
大王(天皇)の虚像だと見られている。

多くの研究家は日本史の草創期についてい
ろいろな意見を発表している。その主張は大和
朝廷が九州から奈良盆地に進出してきた時期と
共に、崇神・応神両大王(天皇)及びその後継
者と、中国の古代史料に記録された百濟(朝鮮)
系の倭(わ)国の六人の王(旨・讚・珍・濟・
興・武)との関係をどのように結びつけるかに
よって分かれる。

それでも仁徳天皇の時代は存在しないらしい。
古墳の本場は大型古墳の集中する近畿圏であ
るが、その他の地域では大和王朝発祥の地とさ
れる北九州(日向・筑紫)、王朝成立に協力した
と見られる吉備(岡山)、尾張(愛知)、そして
毛野(群馬、栃木)が挙げられる。石岡の船塚
山古墳が東国で二位なのは上に群馬県太田市の
太田天神山古墳(二一〇m)が存在するからで
ある。この状態から毛野(上毛野、下毛野)地
方が、常陸国よりも早い段階で大和王朝の支配
下にあったことが推定できる。後で触れるが継
体天皇の時代(西暦五二七年)に、筑紫国造の

磐井が新羅に扇動されて反乱を起こした。この
時に近江毛野臣(おうみのけのおみ)が六万
の軍勢を率いて朝鮮へ渡るのを磐井が妨害して
いる。名前からすると近江毛野臣は朝廷から北
関東支配を命じられていた人物と思われる。

日本の歴史は神がかりを脱して朝鮮半島の
諸国(新羅、百濟、任那など)と一体の争乱に
巻き込まれていた時代があり、各地で活躍した
毛野国の豪族たちのことを後の時代に日本書紀
の編集者が頼りに思いあれこれ加工して空白の
時代の史料にしたのではないだろうかと思つて
いる。虎塚古墳にまつわる田道の遺品(腕輪)
と妻との話が、次のような仁徳天皇時代の話に
似ているのは単なる偶然ではない。

仁徳天皇の皇后である磐之媛命(いわのひめ
のみこと)の異母妹に雌鳥皇女という美人がい
た。仁徳天皇は自分の異母弟の隼別に仲立ちを
させて雌鳥を宮殿に迎え入れようとした。雌鳥
は、皇后が嫉妬深いから天皇の許に行くのは嫌
よ!と断って、仲立ちをした隼別と同棲してし
まった。天皇は返事を待っていたが、報告が遅
いので雌鳥皇女の様子を見に行くと雌鳥が
自分で機(はた)織りをしていた。天皇は家臣
に命じて誰のための着物を織っているのか調べ
させると、隼別皇子のために織っていることが
判った。天皇は事情を知って一旦は諦めたのだ
が、雌鳥皇女が機を織りながら即興の歌で「鶴
鶉(さざきーみそさざいー仁徳天皇の名)より
も隼(隼別皇子)のほうが優れている」と歌
ったことを聞き、反逆と見なして討手の兵が差

し向けられた。雌鳥と隼別は伊勢国に逃れたが
そこで討たれた。この時に討手の将だった播磨
佐伯直阿餓能胡(はりまのさえきあたいたいがの
こ)と言う者が密かに雌鳥皇女の死体から宝石
の腕輪を奪って家に持ち帰り妻に与えていた。

暫く経って宮中で磐之媛皇后の主催するパー
ティーがあり、各界から招かれた者が夫人同伴
で集まった。その時に播磨佐伯直阿餓能胡の妻
は夫から貰った腕輪を身に着けていた。袖の下
に隠れて目立たない筈だったが、皇后が自分で
来客の一人一人に酒を注いで回った。クリスタ
ルのグラスなど無い時代だから、飲み物も丈夫
な柏の葉を巧く丸めて受けて呑む。今では節句
の柏餅しか包まないが、柏の葉は大切な日用品
であり、この時のパーティー用ではないと思っ
たが、磐之媛皇后が女官どもを連れて紀伊の国ま
で船で柏の葉を摘みに行く話が古事記にある。

仁徳天皇はその留守の間に八田の若郎女(やた
のわかいらつめ)という美人を宮殿に引き入れ
て楽しんでいたというから、皇后も柏の葉には
注意していたのであろう。杯を受ける阿餓能胡
の妻が、悪徳官僚のように何となく袖の下を気
にしている。

皇后は雌鳥皇女の腕輪に見覚えがあり、さり
気なく確かめたが正しく雌鳥皇女の腕輪に相違
ない。皇后は濁酒の入った土器を抱えたまま座
を立ち、腕輪のことを天皇に耳打ちした。阿餓
能胡は直ちに天皇の前に引き出され、伊勢で雌
鳥皇女の死体から腕輪を盗んだことを自白した。
天皇は「二人(隼別皇子と雌鳥皇女)は天皇に

無礼があったから討たれたので罪人ではない。それなのに未だ体温の残る遺体から腕輪を剥ぎ取り、己の妻に与えるとは何事か！」と直ちに阿蘇能胡を死刑に処した。

仁徳皇后・磐之媛命は名前のとおり強い女性、と言うより嫉妬深い女性として記録されている。普通に考えれば旦那が「女性に目がない」のだから奥さんのヤキモチは当然だが、仁徳天皇の实在性に疑問がある以上は何か裏がありそうで、多くの研究者がこの時代の人物関係を詳しく検証されている。各種の説があるが、概して仁徳天皇（仁徳天皇に相当するような男性）は、傍系或いは養子から王位に就いたもので、磐之媛命（磐之媛命に相当する女性）のほうが王位に近い位置にあった、つまり夫婦の力関係が、未だ女王・卑弥呼時代の名残で（或いは現代のよう）に女性優位だったのであろう。古事記も日本書紀も、作者は後世の男性が苦勞しないように気を使って女性優位を曖昧にするために「皇后嫉妬」の話を幾つか捏造したようで、その代表的なものが虎塚古墳の話に脚色された「雌鳥皇女の腕輪」事件である。

日本書紀は事件が起きた年を仁徳天皇の四〇年としているが磐之媛皇后逝去の記録は三五年なので創り話であることが明白、例えば紀元前五〇〇年代に出来て大陸から伝えられた「イソップ物語」の影響があるかも知れない。先に述べたように、この時代は朝鮮半島の百済国と伽羅（任那）国、大和朝廷、それも九州に居た勢力と近畿地方に進出した勢力とが複雑に絡み

合い権力を奪いあって争い本来の日本人そつちのけで日本の歴史をややくしくしているから年代は当てにならないが、各地から伝えられた多くの情報があつた。日本書紀は百科事典の感覚で手持ちの情報を纏めたので、年代の曖昧なものは架空の天皇に押し付けたのであろう。

架空ながら仁徳天皇の時代が古墳時代の最盛期を迎えていたことになる。規模だけで言えば、最大の古墳は仁徳天皇陵だと宮内庁が勝手に決めている大阪府堺市大仙町の「大仙陵古墳（だいせんりょうこふん）」で墳丘長486mを持つ前方後円墳である。そして二番目が大阪府羽曳野市菅田の「菅田御廟山古墳（こんだごびようやまこふん）」約四二〇mの前方後円墳であり、これは宮内庁が応神天皇の陵にしている。大仙のほうは「百舌鳥古墳群」、菅田のほうは「古市古墳群」と呼ばれて周辺は古墳の本場である。しかし仁徳天皇が実在の人物ではないとすると、どうなるのか。

日本歴史学会などが三十年も前から「陵墓の適切な保存と公開」を求める運動を繰り返していたが、今までは「皇室」を楯に研究を許さなかつた前世の遺物のような宮内庁も、ようやく二〇〇七年三月に研究者の陵墓立入り制限を少し緩和したようなのでこれからは歴史の解明が進むものと期待できそうである。神話時代そのままに実在しない天皇まで引き合いに出して重要な古墳への立ち入りを宮内庁が禁じていたことが日本の古代史解明を阻害していたのである。異論はあるかも知れないが、応神天皇は忌み

名を「菅田別（ほむたわけ）」と言い、諸国で八幡宮に祀られているところからも実在の天皇で菅田御廟山古墳の主であることは多くの研究者が認めている。ただ天皇としてよりも、古代中国の書に記録された当時の支配者「倭（わ）の王・武（ぶ）」としてほぼ定着している。倭王・武による日本の王朝が、朝鮮半島の百済王国の影響下に大阪平野で発展したとき、最大の功勞者であつたのは武の弟だつたとされる。この人物は日本の歴代天皇では第二十六代の継体天皇に充てられており、古事記などでは皇統が途絶えた際に応神天皇の子孫として北陸地方から重臣たちに担ぎ出されたように書いてある。

この王（継体天皇に相当する人物）の在世中に九州で「筑紫国造・磐井の乱」が発生しており、磐井を九州にあつた王朝と見る意見もあるから、その頃は誰が王者（天皇）になつても不思議ではない時代だつたらしい。つまり折角、近畿地方に進出したが磐石ではなかつた応神王朝を守り通した人物で、兄の跡を継いで王位に就いた。兄の応神が当時、最大の菅田古墳を自分の生前に造り、弟も五十歳になつたので兄がお祝いに大仙陵古墳を造つてやることにした。大掛りな古墳の築造は、天皇や豪族たちが死んでから始めるものだと思つていたがそうではなかつたらしく朝鮮の風習に従つて本人が五十歳に達したら「寿陵」といつてお祝いに古墳を造つたのだという。

日本の旧陸軍で部下が作成した予算書を見て「俺の直すところがない！」と金額の合計欄に

ゼロを一つ足した馬鹿將軍が実在したらしい。

大仙陵古墳の建造に際しても同じような事が起こった。見本にした誉田古墳の設計図を見た応神天皇、だが継体天皇本人、か或いは請負業者からリベートを貰った設計士だが、四二〇m古墳の後円部付け根の部分を少し修正したのである。このため古墳の全長が七〇m近く伸びてしまったので、それが日本一の古墳になったのだという。そこに眠っているのは当然、継体天皇に相当する人物であるが、朝鮮王朝との関係から主役ではなかったため日本書紀などが仁徳天皇陵として後世に伝えたとされている。宮内庁が継体天皇陵としているのは規模二十一位、墳丘長二二七mの太田茶臼山古墳(大阪府茨木市)である。

さて、石岡市が誇る全国四十六位の船塚山古墳は、その応神王朝時代に中央から派遣された茨城国造・筑紫刀禰の墳墓と伝えられてきた。大仙古墳などと共通する特徴を有しているため建造された年代は前方後円墳の最盛期、つまり応神天皇や仁徳天皇の時代と考えられ、また茨城廃寺や初期の茨城国庁舎、常陸国府などとの位置関係からごく自然に茨城国造説が言われてきたのだが、「有力大首長」「国造級人物」「茨城国又は他の国造」などの意見が多く確定はされていないかった。

船塚山古墳の北側三〇〇mほどの場所に、県道一一八号線を隔てて「愛宕山古墳」がある。全長九七m、船塚山の約半分であるが茨城県内にある凡そ三千数百の古墳の中では十五位以内

になると思う。つまり小さな古墳ではないということである。これが茨城国造・筑紫刀禰の古墳ではないかとも言われている。明治時代に発掘調査をして粗末な壺しか出なかったとか、地域の有力首長などが国造に任命された場合には古墳内のお宝も多いためであろうが中央から派遣された国造は威張っていたかも知れないが自分の古墳に入れる財産があつたとも思えない。むやみに収奪すれば反乱が起こる。地方首長の古墳の規模は概ね一〇〇m前後のようであり茨城国のように、朝廷支配が遅れたと推定できる地域に船塚山のような東国二位の規模の古墳は国造の墓として似合わないかもしれない。そうしたこともあつて、近年は船塚山古墳の被葬者が茨城国造の筑紫刀禰であるとする説が後退しているらしい。

昭和三〇年(一九五五)に霞ヶ浦干拓堤防工事で土砂の採取が必要となり、岸边から四〇〇mほど離れた玉造町(当時)沖州の小高い土地が削られることになった。昔から、古墳ではないかと言われてきたが、茨城の人は古代に無頓着なのか、遺跡どころか自分の墓さえ売りかかない。丘や台地や山を見ると「工事用資材」にしか思えないようで、早くも半分が崩されてしまった。途中で偶然に文化財に関わる人物が現場を通りかかり、通報で県の教育委員会などが残された墳丘を調査していたところ、四月七日のこと、後円部頂上付近の下部、二・七mから石棺が現れ中から途方も無いものが出土したのである。飾り付き金銅製の冠で長さが六〇センチ

もあり、透かし彫りで精巧に作られた飾り部分の模様は珍しい沢山の「馬」であつた。

他にも垂飾付金銅製の耳飾や腕輪、武器、太刀、馬具などが納められていて、古墳の規模は八五mの前方後円墳ながら大きな権力を有する人物のものと判断されたのである。工事は中止されたが、貴重な古墳の姿は既に無く、「三味塚古墳(さんまいづかこふん)」として、いまでも名前だけが全国的に知られている。「騎馬民族征服説」の江上波夫先生は、三味塚から見つかった冠が、南口シアから出土した古代北方ユーラシア大陸の遊牧民族「スキタイ」の冠に酷似していることを指摘された。

「ふるさと風」の会会員募集のお知らせ

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らした文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会です。会費は、会報作成費他として月額2000円と勉強会費(講師料)として月額1000円が必要となります。入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治	0299-24-2063
打田 昇三	0299-22-4400
兼平 ちえこ	0299-26-7178
伊東 弓子	0299-26-1659

常陸地方に至る古代の交通路は縄文時代の名残と、交通手段の未熟から現在の中山道沿いに似た経路であったと推定されている。それは丸山古墳の主に初代・崇神天皇皇子の豊城入日子命（とよきいりひこのみこと）が擬定されていることでも想像は出来る。やがて崇神王朝が衰え、近畿地方の豪族に助けられた応神天皇が政権を握る時代になって、ようやく現在の東海道に相当するような海岸沿いの交通路が開けたものと考えられているのである。それでも箱根の天嶮があり、水路でも九十九里沿岸から鹿島灘にかけての荒波は越え難く、日本武尊遠征のコースで船は相模湾から浦賀水道を抜けて東京湾に入るしかない。河川が幾筋も横切っているため、千葉・船橋辺りに上陸して北上するしかないが印旛沼、手賀沼、新利根川流域、潮来付近から龍ヶ崎、江戸崎までは海であり、そこから先も古東京湾の名残の内海が随所に入り組んで半島状の台地と湾が展開している。陸地は深い森林と谷津などが多くて、迷路のような海路とを使い分けなければ霞ヶ浦周辺の通行は覚束なくなる。

「霞ヶ浦沿岸部一帯には交通の利権を握る豪族が存在していた」…これは考古学・古墳学の第一人者で高松塚古墳復元にも関与とされておられる森浩一同志社大学名誉教授の説である。江戸時代になっても要所には馬方や籠担きのボスが存在していたようだから、街道も整備されていなかった古代には、地域権力者の支配による統制庇護の下でなければ安全な交通は期待で

きなかったであろう。道も碌になかった陸上は野獸などの棲みかであり、とても危険で馬に頼らなければならなかった。

常陸風土記には「行方の馬」が記録されており（小型の馬であったようだが）茨城の国には馬が居るとは聞かない」と書かれている。行方台地には野生の馬が棲息していて、それを飼い馴らして早くから使役に利用していたと思われる。茨城国に馬が居ないと言うのは、古東京湾の名残で沼や河川が多い地形的な問題があったと推測されるが、逆に考えれば船の利用が発達して馬の必要が無かったから食料にしたのかも…。

そこで森教授の指摘に従えば、湖岸の三昧塚古墳から出土した金銅冠に多くの馬の飾りがあったことは「馬の利権」を支配した豪族の存在が考えられ、一方では海上の利権を掌握していた豪族が居たことになる。応神王朝の勢力が常陸国内を少しずつ征服して高浜の台地に拠点を遷すまで、常陸台地沿岸に二大豪族が割拠していた。

当時の霞ヶ浦は「佐礼の流海（されのながれつみ）」と呼ばれた内海である。高浜も恋瀬川の上流まで海岸部が入り込んでいたようで、水路交通の範囲は陸上よりも遥かに広大であった。当然ながら、その海域を支配する豪族の力は強大であると推測される。本拠とした場所こそが常陸風土記・茨城郡に大半の説明がなされている交通の要衝「高浜」なのであろう。そのように考えると船に関わるその名称と相俟って、高

浜の海を見下ろす高台にある「船塚山古墳」の主はその豪族でなければならぬのだがその名前などは伝わっていない、と言っつよりも古事記、常陸国風土記などの編纂時に意図的に無視されたか削られたかであろう。現在に伝わるそれらの古書は政権を握った藤原一族の「我田引水」で書かれており、他の氏族の入る余地は無かった。

大和朝廷の勢力が常陸地方に進出を始めたのは、西暦三〇〇年～三五〇年頃に九州から奈良盆地へ移動してきたとみられる御真木入日子印惠命（みまきいりひこいにえのみこと）の崇神王朝時代と推定されている。この王は朝鮮半島東南部にあつた小国「加羅国（任那）」に関わりのある人物で「騎馬民族征服説」のモデルにもなっているようである。石岡市にとって歴史の原点とも言える龍神山の「蛇神伝説」を伝えたのはこの王朝であり、治世十年には諸国に將軍を派遣して王朝の存在を周知させた。進んできたのは内陸コースと推定されるが常陸国にはどうであろうか。

日本最古の古墳とされる「箸墓古墳（二七六m、第十一位）」は蛇神伝説の発祥地・三輪山麓（奈良県櫻井市）にあり邪馬台国の卑弥呼の墓などとも言われているが、神話では三輪山の蛇神様の妻「倭迹迹日百襲姫命（やまとことひももそひめのみこと） 夫が蛇神と知って箸で女性の身体が一番大切な部分突いて自殺した」の墓とされている。「冗談を抜きにして古墳＝陵墓とすれば、これを御真木入日子印惠命こと崇

神大王（天皇）のものともみなす意見が多い。その崇神大王に信頼の出来る息子が二人居た。治世四八年の元日に、大王は二人の息子を呼んで言った。

「大王の地位をそなたたち二人の中から選んで譲りたい。今夜、身を清めて夢を見るがよい。明日、夢の内容を知らせよ。それによって後継者をきめる」

翌日、二人の皇子は別々に大王の許に行き、夢の内容を報告した。まず兄の豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）は「三輪山の上から東に向かい武器を八回、振り回したら気持ち良かった」と誠に元気のよい夢を見たことを大王に告げた。弟の活目入彦命（いくめいりひこのみこと）は「三輪山の上で四方に縄を張り餌を撒いておいたら雀が寄ってきて啄んだ」と、子供じみた夢を見たことを報告した。何が基準になったか知らないが大王は活目入彦命を皇太子に指名し、長男の豊城入彦命には遠征して東国を治めるように命じた。豊城入彦命は遙々と東国に来て毛野国に定着し豪族たちの祖先となった。先の物語に登場した毛野国の武将たちはその子孫であつたらう。

柿岡地区の丸山古墳は全国でも百数十しかない「前方後方墳」で古い時代の古墳とされている。古墳の主を豊城入彦命とする説がそのとおりならば毛野国定着以前に最初に常陸国まで進んできた崇神王朝の将軍が豊城入彦命であつた可能性がある。勿論、その頃は石岡も未開発の状態にあり、高浜から先の沿岸部は二大豪族の

支配地であり、筑波山麓の柿岡方面（龍神山麓が限界で）だけが崇神王朝の影響を受けたことも考えられるので、龍神山に伝わる蛇神伝説がそれを証明している。

第十一号「飛鳥の異邦人」でも触れたが豊城入彦命の同母妹・豊鋤入姫命（とよすきいりひこのみこと）は、皇位継承のシンボルであり伊勢神宮の御神体でもある八咫鏡「やたのかがみ」を守って生涯独身を通した巫女さんである。崇神王朝滅亡後に職を解かれたが、邪馬台国の女王・卑弥呼の後継者・吉与（いよ）にも擬されている。

神話の世界を覗き見れば、崇神天皇の治世五年に世の乱れや疫病の流行があり、占いの結果天照大神（神鏡）など神様に関するものと、天皇の居所を一緒にしてはいけないとの託宣があつた。神鏡は豊鋤入姫命に託して大和国の笠縫村に遷し、大国主命の霊は異母妹の淳名城入姫命（ぬなきいりひこのみこと）が祀り、さらに蛇神伝説の三輪山の神を大田田根子（おおたかねこ）という人物に祀らせた。この人は自分で鹿島神宮の祭神である建甕槌命（たけみかづちのみこと）の息子と称している。

神話の背景には九州から奈良盆地に進出してきた崇神王朝が先住部族の協力で発展してゆく経過が秘められており、その中で邪馬台国の卑弥呼に似た役割を果たす豊鋤入姫命の存在が気になる。兄の豊城入彦命と共に権力争いに巻き込まれたのかも知れない。豊城入彦命は三輪山頂で暴れた夢を見たために皇位に就けず東国

へ飛ばされた。妹の豊鋤入姫命は皇位の象徴である神鏡を守って苦勞する。そこに蛇神伝説の三輪山が関連して出雲族とも関りがある建甕槌命まで出てくる。前方後方墳は出雲系部族とも関連が深いとされており、豊城入彦命の墳墓ではないかとも言われる丸山古墳が柿岡地区にあり、蛇神伝説の龍神山が近くにある（昔はあつた。）となると、単に「ああ、そうか」では済まされない歴史があるように思えてならない。

常陸国衙があり茨城廃寺跡があり船塚山古墳があるから、或いは常陸風土記に記された高浜の海の記事や「茨城」の伝説があるから、古代の歴史は石岡の台地から始まったとする固定観念を捨てなければ神代の歴史は見えてこないのかも知れないことを、虎塚古墳壁画の伝説や三味塚古墳の冠や船塚山古墳の主が訴えてはいないだろうか。是まで伝えられてきたことの大半は「嘘だよ」と仁徳天皇も言っている。

ことば座「真夏の夜の朗読舞」

8月25日（土曜日午後7時）行方市手賀の須田帆布イベント・ハウス「我家我家」にて小林幸枝が、吹き抜ける真夏の終りの風に乗って、「新鈴が池物語」「古今和歌集」他を朗読に舞います。（入場料：1000円）当日は須田帆布のオシャレなバッグが展示販売されておりますので、ちょっと早めにお出かけになられては如何でしょうか。

須田帆布「我家我家」

行方市手賀 3859 0299-55-1163

茨城の古社寺遍路（上）を読んで

兼平ちえこ

現在の浄瑠璃山東方院国分寺の境内に、質素な趣のある茅葺きの旧千手院山門があります。千手院は弘仁（こうにん）九年（八一八）に、行円上人（ぎょうえんしょうにん）によって開かれ、建長四年（一二五三）心宿上人（しんしゅくしょうにん）の没するまで続きました。

その後の記録はなく、天正元年（一五七三）朝賀上人（あそがしょうにん）によって再建され、人々の信仰を集めていました。大正八年（一九一九）には、浄瑠璃山東方院国分寺と合併し廃寺となりました。

現在の山門は、その当時のものと考えられています。その山門の前に立ちますと、上品な女性的な佇まいからは、想像もつかない恐ろしい情景が目につきます。

蛙股（かえるまた）といわれる部分（社寺建築で荷重を支えるための部材、下方が開いていて力エルの股のような形をしている）の彫物です。

そこに彫られた恐ろしい情景について、「茨城の古社寺遍路」（叢書房の著者一色史彦氏は、「弱弱しい猿を、猛々しい鷲が襲つたの図。裂けんばかりに開いた猿の赤い口からは、恐怖の絶叫が聞こえるかのようです。これをグイッと睨みつける鷲の目は、ランランと鋭く光り、美しい獲物にありついた喜びに満ちているようです。アア、猿の運命やいかに」と書かれています。

一色先生は、東京大学大学院建築史研究室から、東京都立大学建築学科に奉職。教育活動を続けながら、茨城県文化財保護審議会委員として重責をはたされました。

昭和六十三年の山門の修復工事での監理を依頼された一年ほど前に、恐ろしい情景の彫物が示している本来の意味を知ったのだそうです。

恐怖させるこの情景には、まったく逆の意味が隠されており、怖い鷲は慈悲深い観音様の化身であり、弱々しい猿は煩惱に身を焦がした人間の姿であり、欲に溺れ奈落の底に転げ落ちようとする猿を、鷲に早変わりした観音様が救い上げるといふ救済の図なのだそうです。

昭和四十八年から六十二年まで、当時の日本は開発優先の潮流の真っ只中。文化遺産の保存にかかわる人間などは、異端視される社会的状況の中で先生は、私利私欲をはなれ研究者の矜持を保ち、困難をおしきってこの壮筆をなしてげられました。

茨城県に県指定の文化建造物が多いことはこの期間の先生の努力の賜物であると、共に活動をなさった大工の田中様がよせていました。そして、一色先生は更にその著書の中で石岡に熱いエールを投げかけてくれました。

「この石岡はかつて国府が置かれ、常陸の国の中心でありました。現在住んでいる足下の地中には、奈良時代の、青丹よしの大都市の栄華が埋もれているのです。実に心の浮き立つような話ではありませんか。これを町づくりを活かさないとはいえないでしょう。しかも国分寺、国分

尼寺が揃って判明するところとしても有名です。是非とも七重の塔を復元し、ここで国分寺サミットを開催し、石岡の健在振りを全国に示してもらいたいものです。今こそ好機到来、鷲と猿の図を見ながら考えたことであります」と。

「ご家族の皆様の犠牲的な支援の中、一色先生の旺盛な郷土愛に感動し、一部内容を掲載させていただきます」。

この掲載につきまして、一色先生とご交流のある叢書房の太田先生には色々とお教示をいただきましたこと本紙面を借りてお礼申を上げます。太田先生の歴史の里石岡に対して人一倍の熱い思いを寄せておられること、次代を担う若者への語り継ぐことの大切さについて、力説いただいたことに大変感激いたしました。

病む人の

いくつもの いくつもの

願いを受け止めて

山門の今日も静かに

ちえこ

（参考資料）

一色史彦著

「茨城の古社寺遍路・上」（叢書房出版）

「石岡市の文化財」石岡市教育委員会

気にしても仕方がないが 伊東弓子

暖かかった冬も過ぎた。春になったというのに気温だけが後戻りしてしまっている。節目の混沌としている時の移ろいの中で、私自身にも気持ちの中に季節と逆行した冷たさが流れ、隙間風が吹いているような気分になってしまっている。

そんな影響もあるのだろうか、日々の中に気にしても仕方がないことなのだろうけど、心に引つかるものが次々と現れてくる。

四月のはじめのことであった。隣り町の小学校へ五人の子供たちに連れられて遊びに出かけた。あやちゃんという小学一年生の子がその小学校に通っており、得意になって色々説明してくれた。

理由もなく大はしゃぎする子供達の周りを、時折桜の花びらを散らして風が抜けていく。

「ねえ、全部を順番に使っていいこうよ」

校庭に作られた遊具を端から順に遊んで以降と話がまとまったらしく、一斉に走り出した。付き添いのというか、本当は付き添われているのかもしれない婆さん同士は、それを眺めるしかない。一緒に走り回って遊ぶには余りにも体力の差の逆行は大きすぎた。

しばらく子供等を眺めていると、

「だめだよ！ だめだよ！ それに乗っちゃあ」

「そつちもダメ！ 書いてあるでしょう」

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」特別公演
小林幸枝が情熱のフラメンコの風に
石岡府中城：鈴姫伝説を朗読舞！

= 9月29日(土曜日)午後6時半開場 7時開演 =
(入場料：前売券2500円 当日券3000円)

チケットはギター文化館・カフェ・キーボー・ことば座事務局で取り扱っております。

「もう恨みますます。お許しも請いませぬ。この触れ合う肌の温もりが私のすべてです。これが人の世なのですね。これが生きることなのですね」

石岡府中城に伝わる、今ではは忘れられてしまっている鈴が池の鈴姫伝説。その鈴姫伝説に近藤治平が平成の新解釈を与えて書き下ろした新鈴が池物語。小林幸枝が初めて舞台に立ったのがこの物語。以来、十八番ものとして、毎回新しい演出で再演を重ねてきました。今回は、9月の月光の下、舞の風として情熱のギター、フラメンコがコラボレーションします。

「あなた。私に百の恋をくださいますか。私は百の舞いにお返しいたします」

常世の国に詠まれた恋歌の古今を9月の月光の下、柴間の風とギターの曲にのって人の自然としての恋を小林幸枝がおおらかなスケール感を持って朗読に舞います。

ギター文化館 石岡市柴間 431-35 0299-46-2657

ことば座 石岡市府中 5-1-35 0299-24-2063

fax0299-23-0150

「年上の子が、必死になって止めているが、小さな子はいくことを聞かないらしい。それで、婆さん達に助けを求めてきたので、行ってみると、コンクリートの大きな山には、古ぼけてたんだロープが張り巡らされていた。随分長いこと張り巡らしてあったのだから雨ににじんだ使用禁止の札がひん曲がってぶら下がっていた。コンクリートの山には、すべり台、登り梯子、トンネルなどがある。色々な遊びが出来る子供達にとっては魅力ある大型遊具だ。」

隣りには段違いの鉄棒が四箇所並んでいる。見ると全部に「使用禁止」の札が下がっている。ロープもよじれ弛んでいる。このロープの方がよほど危なく見える。どこがいけなくて、危険なのか私の目にはさっぱり分からない。あやちゃんに聞いてもわからないという。入学式は後三日後だといつのに、直さなくて良いのだろうか。

友人の話

隣りには共働きの若夫婦が子供二人と住んでおり、夫婦は同じ職場に働いているのだそうだ。話を聞いていて、心配しても仕方のないことが気になり始めた。

夫婦の職場は、宿直と日勤があるのだという。二人して宿直になるということはないのだ。そうであるが、二人の子供のことが心配になってきた。

しかし、それは年寄りの固定観念で、ご主人が奥さんなしで子供達の食事の面倒を見るのは大変だろうな、という勝手な想像だ。良く考えてみると、その若い夫婦には、とんでもなく迷惑な想像なのかもしれない。仕方のないことを気にしたものだ。

今日は朝からのテレビ局も、イチロー対松坂の話ばかりだった、という声が私の耳に聞こえてきた。耳敏くなってきたと思ったら、海に向かうことで日本中が大騒ぎしているうちに「国民投票法案」は衆議院を通過してしまっただね、と話す主婦の声が聞こえてきた。飛んでいって、本当にそうですよ、と話に加わりたい気分になる。でも、そんな議員達を選挙したのは私だ。

何か一つ気になりだすと、気になりが連鎖して、何もかもが気になり始める。

・この年寄りのとこに送ってくる書
・類の文字が小さすぎるし、言葉も何て難しいのだ。

・入学式を待つ父母達が、入り口で煙草の煙を鼻から口から吐き出ししている姿も妙に心に引っかかってくる。

気にしたって仕方がないか。
なるようにしかならないか。
でも、気になります。
皆で何とかしようよ。
皆じゃないか。
自分のできることをやるしかない、です。

富士登山

小林幸枝

なかなか梅雨明けが来ない外を眺めていたら、突然に富士山に登ったことを思い出した。富士山に登ったのは、梅雨明け宣言が出た二日後のことだった。

それは五年まえのこと。

一度は富士山に登って頂上から下界を眺めてみたいと、友人知人を何度も誘ったのですが、「もう登ったからいい」だとか「登りたくない」と言われ、実現することが出来なかった。

ダメかと諦めかけていたところ、岡山県の聾啞者登山愛好会の友人から、突然のお誘いが来た。何でも思い続けていると願いが叶うものです。しかも二日前には梅雨が明けてくれた。梅雨明け一週間が一番大気が安定しているので、富士登山には絶好です。

岡山、大阪、京都からの人達と富士吉田で合

流。ワクワク楽しい気持ちでバスに乗り、五合目に到着。ここから登山になるのだけれど、外は何と蒸し暑いことか。登山の経験のほとんどない私、この暑さの中の山登り大丈夫かな、とちよつと心配。でもバレーで鍛えた体力があるから大丈夫と皆について登り始める。

何合目あたりに来た時だろう。目の前に雲海が広がった。モコモコとした綿を敷き詰めたような絶景。来れて良かった！

夕方、八合目の山小屋に着き、ここで仮眠をとる。山小屋は八時に消灯する。早すぎると思っただが、もう寝るしかない。

翌朝、というか深夜一時半、頂上を目指して出発。これでは八時には寝ないと身体が持たないはずだ。

急斜面の岩場を登る。チョットきついが、それよりも寒さが凄い。吐く息が真っ白だ。後で紹介しますが、この寒さで大失敗をしたのだ。

頂上の鳥居についたのが四時ごろ。御来光に十分に間に合う時間。それにしても真夏だというのにこの寒さは何ということか。でも、雲海の中から太陽が昇り始めたときの美しさは、見たことのない幻想的というか、私の文章では表現の仕様がなほ、神々しく美しいものでした。富士山は一度登れば良いといわれていますが、何度も登ってくる人たちというのは、この光景に魅せられて登ってくるのだと理解できた。

「一度登ったからもついい」
そう言った友人は、この光景は見えないの

だと直ぐ納得できた。確かに富士山は登るだけの山ではないのだと思う。この景色を見なかつたら富士山には登ったとはいえないのだとも思った。

私も、もう一度登ることはないかもしれないけれど、この神々しい美しさは生涯忘れることはないだろう。山を登るのは大層きついものだつたけれど、本当に来てよかった。

山登りはきついと実感したけれど、本当のきつさは山を降りる時であることをこの富士登山ではじめて知った。降りには楽、とんでもありません！ 富士の砂走りとは良くぞ言った。翌日筋肉痛にならない人はよほど登山慣れた人だ。砂混じりの小石の坂道を、足をとられ、自分の踵を踏みつけ、纏れて走りたくないのに走らされてしまう。何と降り of 過酷なものかと知らされたのでした。

バレーで身体は鍛えていたつもりだったけれど、登山の知識を鍛えておかなかったのが失敗だった。乏しい知識で、万一を考え万全を期してリュックに色々詰め込んだのは間違이었다。私のリュックが、この半分の重さだったら、砂走りももう少し上手く降りられたのかもしれないと思った。

岡山の人たちは流石にベテラン。必要最小限のものしかリュックに入れてなかった。そのくせ山を降りた時の軽装の着替えもちゃんと持ってきていた。私のリュックはただただ膨らんで重だけだった。

言われたことを守らなかつた大失敗は、山小

屋から貰ったおにぎりをリュックの中のほうに入れておいたほうが良いよ、と言うアドバイスを聞かないで、取りやすいように一番上に入れたのですが、頂上で朝食をしようと思つたら、おにぎりが冷たく固まってしまつていて、食べられない。仕方なく山小屋の売店でおにぎりを買ったのですが、高い！ ビックリするほど高いのです。

私の無用のデカリュックを知らされたのが、河口湖のホテルで入浴した後でした。汗を流してさっぱりとした後の着替えが、寒さ予防の山の服ばかり、下界は三十度を越す猛暑なのです。ベテラン登山者は皆涼しそうに着替え。私は暑苦しい山の服。それで仕方なく、熱いほうがビールが美味しいと負け惜しみ。そして、もう一杯。でもそのあとが大変。汗のサウナ風呂。

東京でラッシュアワーにぶつからないようにと解散したつもりでしたが、着いたらラッシュの真つ只中。暑苦しい服装の山女はジロジロ見つめられて、恥ずかしい。

翌日のことです。また山登りをさせられてしまった。大変な筋肉痛で、駅の階段の上り下りの辛かつたことといつたら、富士登山以上。でも、あの雲海に見た神々しい御来光を確りと頭の中に焼き付けることが出来たので大満足。

岡山の友達に五年経つた今も、誘つてくれてありがとつ言葉、梅雨が明ける時期には声にしています。

古里を劇しく語り演じる人を 白井啓治

宣伝文のようになってしまつが、お許しただきましよう。

十月から朗読舞俳優の小林さんと一緒にやっている「ことば座」で研究生を募集する事になった。朗読劇に古里を確り演じられる俳優を育成して行こうと考えたからである。

ことば座は、小林さんが朗読にのつて手話を基軸とした舞い演技で表現する、朗読舞劇団として設立し、十月で一年を迎える。小林さんには、この常世の国と呼ばれた古里の風景をモチーフにした百の恋物語を書くことを約束し、ギター文化館を拠点に定期公演を行なつており、先月七月十五日、台風の中ではあつたが第三回目の公演を終わった。

小林さんも漸くと言つと変ではあるが、プロの女優さんとしての覚悟が作られてきて、表現のスケールも劇しくはげしく大きなものとなつてきた。これから益々、期待してよい女優さんであり、また魅力ある古里文化大使的な存在になつてくれるだろうと思つている。

ことば座の公演では、風の会の会員である兼平さんが舞台美術を担当し、ふるさとの風を色に染め、また常世の国の五百相に挑戦し、会場全体を一つの舞台として捉えた装飾を行なつてもらつている。

小林さんも兼平さんも、またこの会報にふるさと歴史物語を発表されている打田さんも、市民プロを育成しようと思つた立ち上げられた「ふるさ

とルネサンス」の塾生であるが、既に皆さんは市民プロとしてのレベルを超えてきていると、指導者の欲目ではなく思っている。技術的な部分にはまだ大きく課題を残しているが、物語を紡ぐ見方・考え方は確りと出来ていると言っただろう。

小林さん、兼平さんは市民プロのレベルを離れて、ふるさとを表現するプロとしての道を歩き始めている。打田さんもこの会報を通じてのファンの方がおられる。しかし、このまま会報だけの発表で終わらせるのではなく、折角の作品を違う形で発表を考えてみたいと思っただけであつたが、同時に、この歴史の里には忘れ去られている数多くの伝説や民話のあることから、それらの発見、再構築を願い、需要と供給の原理ではないが、物語を朗読に演じる人が育成されれば自然に物語の発掘・再構築も行なわれるであろうと、朗読劇俳優の育成を考えたのである。

「何故、朗読なのか？」

それは、朗読といつのは一人でも演じられる、一人芝居とは違つた演劇だからである。

朗読を演劇と言つと不思議な顔をされる人もいます。しかし、朗読は演劇なのである。

朗読とは、余計な感情を込めず、書かれた文章をスラスラよどみなく標準語で淡々と読むものだと思つている人が実に多く、そう指導する人の多いことも困つたことである。また、そうかと思つと読み聞かせの会などによく見られるカラオケ演技を入れた朗読も困つたものではあ

る。

演劇とは、劇しく演ずる(はげしく演ずること)をいう。朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)朗読者としての心を演じることがいふのである。

物語といふのは、はじめに言葉があつて紡がれるのではなく、はじめに作者の心があつて、言葉に紡がれたものである。だからその物語を朗読する時は、言葉に紡がれた作者の真実をつけて、表現者として劇しく(はげしく)ドラマ(真実)の心を演じることが必要なのである。

開設する俳優塾の研究生には、受講料もそのであるが、かなり高いレベルを求めようと考えている。募集人数も、責任の負える範囲に絞らせてもらおうと思つている。

入塾は、小学4・5年生以上ならば年齢に制限はない。特に、第二の人生を「ふるさと文化大使」として、確りとした表現スキルを身につけた「ふるさと語り劇俳優」にチャレンジしてみたいと考える団塊の世代の方、大歓迎である。また、朗読舞および朗読舞劇に興味をお持ちの聴覚障害者の方も大歓迎である。

入塾には簡単な表現力試験を考えているが、詳しくは、080-3125-1307(白井)まで連絡を。

思いつきりの宣伝である。

ことば座俳優塾では、俳優術の基本の中的基本である劇しく演じるための表現の心の構築について、科学的イメージング法を通して指導してい

きます。

イメージの実際の内容とは類知覚体験をする、ということとです。人間の動作行動表現は、知覚体験に基づいて行なわれます。確かなイメージングを行ない、演劇表現としての類知覚体験を構築するためには、作文力(仮説設定能力)を高めることが必要です。

ことば座俳優塾は、朗読舞俳優小林幸枝と同様に脚本・演出家の白井啓治の私塾的な形態を持つて、少数精鋭のマンツーマンの指導を行なつてまいります。

閉塞した「ふるさと」に必要なことは、確りとふるさとを謳つことのできる人材を育てることである。飛躍して思えるだろうが、文化という側面から見たとき、趣味のサークルの発表の場を、ボランティアと称して老人ホームなどに求め、自己満足を得ようとする卑猥な感覚を捨てない限り、閉塞から逃れることはできないだろうと、辛らつではあるが断言してよいといえる。この事は会報や劇団を離れ、一人の作家として断ずるものである。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)